

富士宮市教育委員会文化財調査報告書第26集

箕輪 A 遺跡

—富士宮市大岩三ノ輪農道路線敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2001

静岡県富士宮市教育委員会

富士宮市教育委員会文化財調査報告書第26集

箕 輪 A 遺 跡

—富士宮市大岩三ノ輪農道路線敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2001

静岡県富士宮市教育委員会

序

勇壮な富士山に抱かれたこの富士宮市は、豊かな自然に恵まれ、古来より多くの遺跡が築かれてきました。とくに、古く縄文時代は、今回報告する箕輪A遺跡をはじめとして、小泉の若宮遺跡、杉田の滝ノ上遺跡、野中の滝戸遺跡など有力な遺跡が数多く点在しており、この富士山西南麓の岳南地域でも特筆した地域としてとらえられています。

箕輪A遺跡は、戦前より学術的な地域史研究の先駆として、静岡県の考古学界でも重要な役割を果たしていた「岳南考古学会」の創始の一人でもある故佐野要吉氏ら地元郷土史家により紹介され、広く中央の学会まで知られる著名な遺跡として、古くから注目されていました。昭和62年には、富士宮市教育委員会の手で、初めて発掘調査のメスが入れられ、良好な縄文時代集落の一部を垣間見ることができます。

今回、大岩三ノ輪農道改良工事に伴って実施されました箕輪A遺跡の発掘調査は、かつて住居跡や遺物が発見された箇所の北東端にあたり、そうした周辺地域においても縄文時代中期・後期の土器類など貴重な資料を得たことは箕輪A遺跡が予想以上に有力な遺跡であることを再認識する結果となり、富士宮市の原始・古代を考える上で、極めて重要な調査であったと言えます。

発掘調査と本書の刊行にあたっては、富士宮市環境経済部農政課をはじめとする関係各位の遺跡保護に対する深いご理解とご協力に支えられて、実施することができました。文末ではありますが、心より感謝申し上げる次第であります。

平成13年3月

富士宮市教育委員会

教育長 藤井國利

例　　言

1. 本書は富士宮市大岩三ノ輪農道路線敷設事業に伴う「箕輪A遺跡」の発掘調査報告書である。静岡県富士宮市大岩字三ノ輪1299番地7, 1298番地3他に所在する。本事業において発掘調査は2期にわたって行われている。第1期は平成12年12月13～24日であり、第2期は平成12年6月1日～7月31日である。
2. 箕輪A遺跡はこれまで2次にわたって行われている。いずれも富士宮市教育委員会によるもので、本報告書において昭和62年3月16日～同30日実施を第1次発掘調査、平成12年12月13～24日と平成12年6月1日～同年7月31日実施を第2次発掘調査とした。第1次発掘調査の成果は富士宮市教育委員会1993富士宮市文化財調査報告書第16集『富士宮市の遺跡』に報告されている。
3. 整理・報告書作成作業は第2期発掘調査終了後引き続き行われ、平成13年3月26日に本書を刊行してすべての事業を終了した。
4. 本書の執筆ならびに編集は調査担当者で分担して行った。
5. 写真撮影は調査担当者で分担して行った。
6. 本報告による出土品及び記録図面・写真などは、富士宮市教育委員会で保管している。

凡　　例

1. 地形図・実測図に示す高度はすべて海拔高度をもって示している。
2. 地形図は建設省国土地理院長の承認を得て複製し、富士宮市役所が調整したものを使用している。

第2図（承認番号）昭60、部複 第22号 縮尺5万分の一地図

第3図（承認番号）平8、部公 第64号 縮尺1万分の一地図

第5図（承認番号）平8、部公 第64号 縮尺2,500分の一地図

3. 土器は縮尺1/3、石礫は縮尺3/5、その他の石器は縮尺1/3である。
4. 土器観察表に記す色調は破片面積の最も広い範囲を専有する色合いである。新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局監修）で補っている。
5. 土器観察表に示す胎土の略語は以下のとおりである。

粗…粗粒 細…細粒 多…多量 少…少量 英…石英 長…長石

有…有色鉱物（角閃石・輝石・カンラン石） 雲…雲母（金雲母も含む）

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
3. 屈序	6
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	
1. 調査の経緯	8
2. 調査の経過	9
3. 調査区の名称	10
第Ⅲ章 調査の内容	
1. 遺構	11
(1)土坑	11
(2)溝	11
2. 遺物	16
(1)縄文土器	16
(2)中近世陶磁器	25
(3)土器片円盤	25
(4)石器	28
第Ⅳ章 まとめにかえて	29
調査体制	29
報告書抄録	30

挿 図 目 次

第1図	富士宮市の地質	2
第2図	縄文時代中・後期及び早期主要遺跡分布図	3
第3図	周辺の遺跡分布図	4
第4図	土層柱状図	7
第5図	調査区位置図	9
第6図	調査区全体図	12
第7図	遺構図(1)	14
第8図	遺構図(2)	15
第9図	遺物分布図	17
第10図	第I類土器実測・拓影図	19
第11図	第I類土器拓影図	20
第12図	第II類土器実測図	21
第13図	第III・IV・V類土器実測・拓影図	22
第14図	第V類土器実測図・土器片円盤拓影図・中近世陶磁器実測図	23
第15図	石器実測図(1)	26
第16図	石器実測図(2)	27

表 目 次

表1	周辺の遺跡名一覧	5
表2	遺構計測表	13

写 真 図 版

- 図版1 遺跡遠景
- 図版2 遺跡近景
- 図版3 調査区全景
- 図版4 土器出土状況（第12図-23）
- 図版5 曾利式土器（左第12図-23、右同図-24）
- 図版6 土器
- 図版7 土器片円盤
- 図版8 石器

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境（第1図）

静岡県富士宮市は日本有数の火山である富士山の西南麓一帯を占有する。山頂3,776mから潤井川沖積平野の石宮付近(35m)まで3,741mの標高差がある。箕輪A遺跡は富士山の丘陵上、標高220m付近、富士宮市大岩字三ノ輪1299-7・1298-3他に所在する。南に平坦面を有するやや小高い丘陵上一帯がその遺跡範囲である。東を流れ下るサギ沢川は現在川幅4mにも満たない富士山の放射谷の1つであり、箕輪A遺跡付近に至って狭小な扇状地を形成している。眼下には潤井川やその沖積平野を、潤井川の対岸には白尾・明星山丘陵を眺め、南に目を転じれば遠く駿河湾や伊豆の山々を望むことができる。

富士宮市域の地形は火山活動によって強く影響を受けてきた。そのほとんどは山地であって、富士山のなだらかな丘陵が東に広がり、その北から西にかけては天守山地、羽鮛丘陵、白尾・明星山の山々が壁のように取り囲んでいる。他地域とをつなげる道としては、羽鮛丘陵と白尾・明星山丘陵とを分ける侵食谷を通り、富士川沿いに山梨・長野へぬけるルートと、潤井川沿いに東海道へぬけるルートとがながきにわたり利用されてきた。また、富士宮市域は水に恵まれている地域と全く恵まれない地域とに分けられる（塩川1971）。それというのも富士山の火山活動によってその山麓には多くの湧水地と放射谷が誕生し、小規模ではあるが数多くの河川が集中するところと、そうでないところが形成されているからである。箕輪A遺跡の周辺、大岩や箕輪・小泉・杉田と呼ばれる地域は時代を問わず遺跡の集中する地区であり、小規模な河川が集中する場所でもある。

＜文献＞

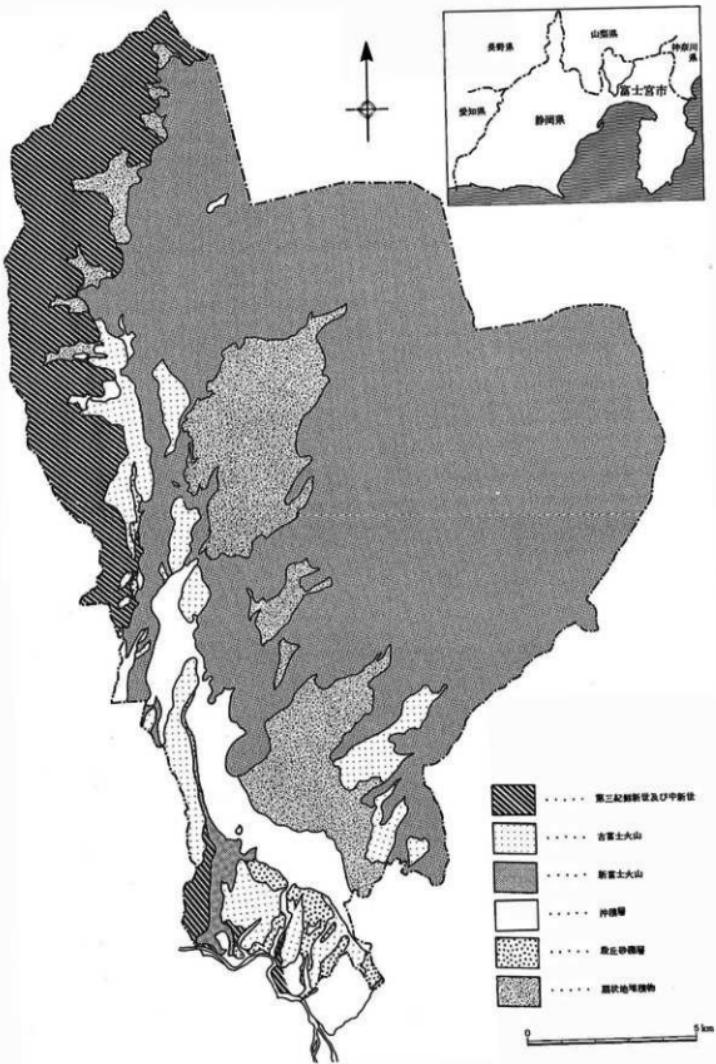
塩川隆司1971『總説第1章 富士山』『富士宮市史 上巻』

富士宮市域自然調査研究会1988『富士宮市の自然』

2. 歴史的環境（第2・3図、表1）

静岡県は現在でも、安倍川を境に東西の文化圏に分かれるといわれる。富士宮市域は東の文化圏に含まれるが、しかし一方で、方言において類似性が認められるなど、北の山梨県ともつながりの深い土地である。

富士宮市内においては後期旧石器時代から人々の生活の痕跡が知れるが、様相は窪い知れるのみで、地域性を読み取ることのできるようになるのは縄文時代早期（若宮・代官屋敷・沼久保坂上・石敷遺跡等）に至ってからである。以後今日まで、居住域の拡散と収縮を繰り返しながら人々の生活は脈々と営まれて、私達は富士宮市域における文化的特性を知ることができるわけである。すなわち、縄文時代早期においては関東の要素の強い撫糸文系土器群や沈線文系土器群と共に、関西の要素の強い押型文系土器群が出土したり、縄文時代前・中期にあっては、より深く関東甲信地方的要素を受けた（代官屋敷・滝戸・箕輪A・滝ノ上・千居遺跡等）に、少量ながら北白川下層式や北屋敷式土器の出土を見たり（滝戸遺跡）するなど、古くより各文化圏の辺縁としてあった様子を知ることができる。



第1図 富士宮市の地質
(津屋弘遠1968原図、小川賢之補案1988を改変)



第2図 縄文時代中・後期及び早期主要遺跡分布図



第3図 周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	種別	時代
1	石原遺跡	散布	縄文
2	松葉遺跡	散布	縄文(前・中)
3	東谷戸遺跡	散布	縄文(中)、古墳(前)
4	稻干場遺跡	散布	縄文(早・中・後)
5	上ノ山遺跡	散布	縄文(早・中・後)
6	箕輪A遺跡	集落	縄文(中・後)、古墳、中・近世
7	箕輪B遺跡	散布・集落	縄文(中~後)、古墳
8	滝沢遺跡	散布	縄文
9	峰ヶ谷戸遺跡	散布	縄文(前・中)、古墳
10	宝田遺跡	散布	縄文(中・後)、古墳、中世、近世
11	辰野遺跡	散布	縄文(早・中~晚)、弥生(中)、古墳
12	時田遺跡	散布	縄文(中・後)、古墳
13	丸ヶ谷戸遺跡	散布・集落・古墳・墓	縄文(中・後)、弥生、古墳、中世
14	峰石遺跡	散布	縄文(前~後)、古墳、奈良
15	大室遺跡	散布	縄文(中・後)、古墳
16	三ツ室遺跡	散布	縄文(前)、古墳(前)
17	神祖遺跡	散布	縄文(早・中)、古墳
18	木ノ行寺遺跡	散布・集落	縄文(中・後)、古墳、奈良
19	出水西遺跡	散布	古墳(前)
20	出水遺跡	散布	縄文(前・中)、古墳
21	寺ノ後遺跡	散布	縄文(中)
22	寺内遺跡	散布	縄文(前・中)、古墳
23	小泉中村遺跡	散布	縄文(後)、古墳(前)
24	大室古墳	古墳	古墳(後)
25	神祖山ノ神古墳	古墳	古墳(後)
26	神祖2号墳	古墳	古墳(後)
27	神祖3号墳	古墳	古墳(後)
28	寺内山ノ神古墳	古墳	古墳(後)
29	田上原遺跡	散布	縄文(中)
30	大辻遺跡	散布	縄文(中)
31	新製遺跡	散布	縄文(早・前・中・後)
32	金井坂遺跡	散布	縄文(中)
33	出水東遺跡	散布	縄文、古墳(前)
34	小泉向原遺跡	散布	縄文(中)
35	丸塚遺跡	散布	縄文(中)
36	杉田西原遺跡	散布	縄文(早・中)、古墳
37	代宣屋敷遺跡	散布・集落	縄文(早・中・後)、古墳
38	大宝坊遺跡	散布	縄文(中)
39	若宮古墳群	古墳	古墳
40	若宮遺跡	散布・集落	縄文(早)
41	瀧ノ上遺跡	集落・墓	縄文(前~後)
42	焼畑遺跡	散布	縄文(早・中・後)
43	杉田中村遺跡	散布	縄文(中・後)
44	寺地遺跡	散布	縄文(前・中)
45	中沢遺跡	散布	古墳、奈良、中世
46	向田遺跡	散布	古墳(前)
47	上石敷遺跡	集落・墓	縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世
48	天神冢古墳		認認
49	虚空蔵社古墳	古墳	古墳(後)
50	石敷遺跡	散布	縄文、弥生、古墳(前)、奈良、中世
51	中ノ土手遺跡	散布	縄文(前)、古墳(前)
52	萩間遺跡	散布	縄文(中)
53	上宿遺跡	散布	縄文(早・中)、古墳
54	樺現遺跡	集落	縄文(前・中)、古墳(前)、奈良
55	蟹入越遺跡	散布	縄文(中・後)、弥生、古墳
56	ジンゲン沢遺跡	散布	縄文(早・中・後)、古墳
57	ジンゲン沢遺跡	散布	縄文(早・中・後)、古墳
58	川坂遺跡	散布	奈良~平安

※ 57 富士市ジンゲン沢遺跡と同一

※ 58 富士市川坂遺跡と同一

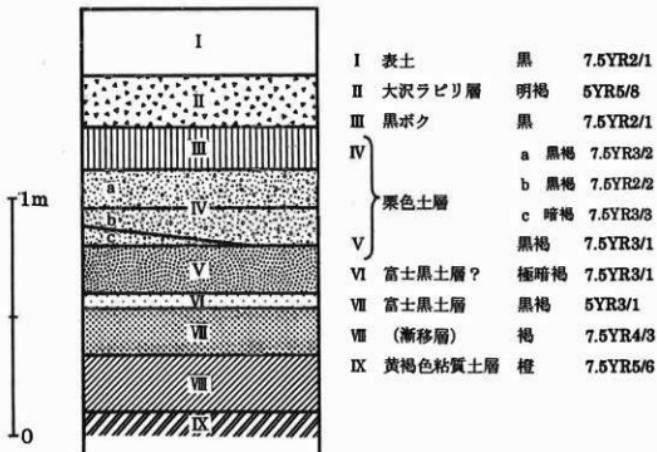
表1 周辺の遺跡名一覧

3. 層序（第4図）

本調査区ではこの地域の基本的地層を観察することができた。これまでの発掘調査によって確認されてきた堆積状況と大枠ではかわりない。ただ、従来、本地域縄文時代前期から中期にかけての遺物包含層とされ、「栗色土層」と呼称される層を今回はIV・V層と2分している。また、VII層は「栗色土層」とVIII層の「富士黒土層」との間にあって、「富士黒土層」に近い特徴をもつが、本遺跡においては遺物の出土が見られないとどちらにも比定していない。

- I 表土 黒色有機質土からなる表土層で、草木の根が及んで乱れている。下部には小粒で少量のスコリア粒が点在している。
- II 大沢ラビリ層 細密なスコリア粒が堅固なマサ層をつくる、いわゆる「富士マサ」である。弥生時代後期～古墳時代初頭、律令時代の遺構が表土層下部からこの層に掘り込まれており、遺構確認面であるが、本調査区には該期の遺構はない。乾燥すると橙色から白っぽく変色し、脆くなる。同じ富士山東南麓で本遺跡よりやや標高の高い稻干場遺跡ではスコリア粒の含有率の違いによりさらに3層に分かれているが、本調査区ではその最下部のみ観察できた。
- III 黒褐色土層 黒色の強い土層帶で、別名「黒ボク」と称されている。本来は縄文時代後期～晩期の包含層であるが、本調査区には遺構・遺物とも確認されていない。上層の影響で上部には小粒のスコリア粒を含み、中ほどから下部にかけては中粒のスコリア粒を含む。下部にいくにつれ、粘性、しまり共に増す。
- IV 暗褐色土層 上下III・V層に比ベスコリア粒含有率が高く、やや赤味がかったみえる。スコリア粒の含有率の違いが層状となって確認できたためa・b・cの3つに細分した。最上部のaは中粒のスコリア粒含有率が上部のIII層より高くなる。また最も厚さがあり、途切れることなく谷まで続く。中層のbは中粒のスコリア粒含有率がaより低く、調査区北側の平坦面、南側の谷へと続く急斜面上には観察されなかった。最下部のcは最もスコリア粒の含有率が高く、堅固である。調査区北側の平坦面を中心として所々に観察され、谷部においては観察されなかつた。いずれも縄文時代中・後期の遺物の包含を確認した。下層のV層とともにいわゆる「栗色土層」に相当しよう。
- V 黒褐色土層 上部のIV層より黒色が強く、稻干場遺跡において「黒色土層帶」とされていた層に相当する。途中途切れはするが、谷まで観察できる。中粒のスコリア粒をまばらに含み、粘性、しまりともIV層よりやや弱くなる。縄文時代中・後期の遺物包含層であるが、上層のIV層より出土数は減る。

- VI 極暗褐色土層** 上部のV層より茶色がかり、明るく感じる。平坦面に厚く、急斜面では見られなくなる。中粒のスコリア粒は含むが、最も含有率は低く、V層よりさらに粘性・しまりとも弱くなる。稻干場遺跡の茶褐色土層cに相当する。この層からは遺物・遺構の出土はみていない。
- VII 黒褐色土層** 大粒のスコリア粒が含まれるため、やや明るく感ずる。下部にいくほどスコリア粒子をより多く含むためお明るく感ずる。縄文時代早期～前期の遺物包含層である「富士黒土層」に相当する。若宮遺跡ではこの層が包含層となって、遺構は下部の漸移帶で確認され、代官屋敷遺跡では褐色土層（富士黒土層にあたる）の下部から富士黒土層にかけて楕円押型文土器、撚糸文土器が検出される。
- VIII 褐色土層** VII層とIX層の間の漸移帶である。他遺跡の確認状況をみると、場所によって厚さや色調に違いがあるようである。
- IX 橙色土層** 大粒のスコリア粒を多量に含むため赤色に近い。スコリア粒の混入度合には部分的に差異があって、それが帯状になって堆積しているところは乾燥すると白っぽく変色するが、混入される土層がローム系統の黄褐色土であるため、際立って白さが増すことはない。旧石器時代の包含層とされるが、遺構・遺物の出土はなかった。（佐野 恵里）



第4図 土層柱状図

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

1. 調査の経緯（第5図）

富士宮市村山地区に対する広域的な農地保全整備の一環の中で、富士宮市経済部林政土地改良課（当時）では、「大岩三ノ輪農道改良工事」として、新たに農道を敷設する計画を策定したが、工事計画地が、岳南地域の考古学史上著名な「笑輪A遺跡」の範囲内に位置し、工事に際して、その取り扱いが問題となった。工事主体者の林政土地改良課と富士宮市教育委員会文化課は、その取り扱いについて慎重な協議を行ない新設の道路としてのその敷設工事であることや現状のままで保存できないことなどを確認すると共に、埋蔵文化財を記録保存する方向で話を進めた。

文化課では、平成11年4月16日付けで林政土地改良課より提出された『埋蔵文化財分布（確認）調査依頼書』に基づき、具体的な遺跡の範囲と内容を把握するために、平成11年5月10日～13日に工事対象地に対して確認調査を実施した。その結果、その全域より縄文時代を主体とした土器・石器の包蔵が確認された。

その成果を踏まえ、文化課は、林政土地改良課に対して正式に文化財保護法に基づく本格的な埋蔵文化財に対する発掘調査の必要を伝えた。これに対して、林政土地改良課は、快くその旨を承諾され、本格的な発掘調査を実施することが決定された。

なお、計画された農道は、サギ沢川を横断する状況で、橋梁が敷設される道であり、建設事業は、その橋梁を先行し、後に道路部分を建設する予定で計画されたものである。この事業計画に合わせて、文化課では、平成11年度に橋梁部、平成12年度に道路部分の発掘調査を実施することで、それに対応することにした。

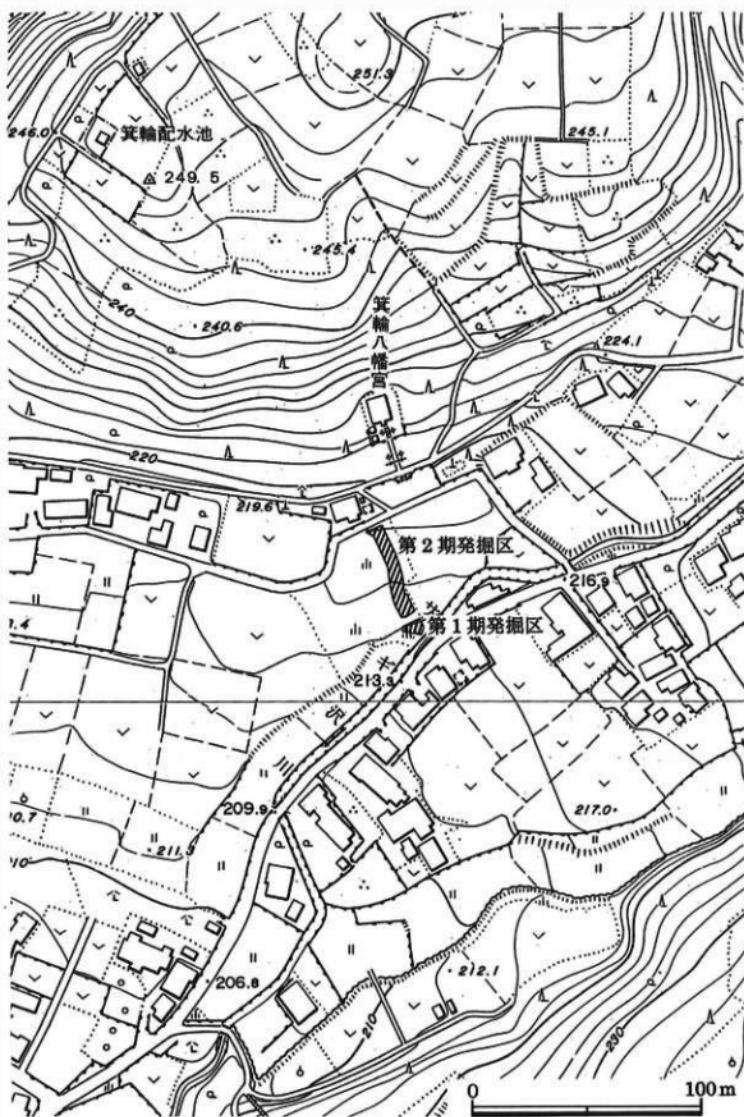
まず、平成11年12月3日付けで林政土地改良課から提出された埋蔵文化財発掘調査通知により、文化課は、橋梁部について平成11年12月13日～24日に発掘調査を実施した。この箇所は、工事対象地の南端部にあたり、サギ沢川の河岸部で、橋台設置と川の護岸に伴う工事箇所にあたる。

発掘調査は、30.8m²の広さを対象地としたが、大半がサギ沢川の旧河道であることが確認された。そこでは、縄文土器と近世陶磁器の小破片が混在して発見され、旧河道に厚く堆積した典型的な流入土の様相を示していた。

年度が変わり、平成12年4月に実施された富士宮市役所の組織改正に伴い、林政土地改良課が環境経済部農政課に統合された。そのため、この事業の開発主体の名称に変更が生じている。

その農政課より平成12年5月17日付けで提出された埋蔵文化財発掘調査通知により、文化課では、残る道路部分についての発掘調査を平成12年6月1日～7月31日に実施した。対象面積は、250m²で、縄文時代・近世以降の遺構・遺物が発見されている。

（渡井 英善）



第5図 調査区位置図

2. 調査の経過

箕輪A遺跡の中で今回の発掘調査範囲は、遺跡の北西に位置する山稜部と東端を流れるサギ沢川の間に挟まれた南東方向に下る傾斜面を持つテラス状区画で、その緩やかな傾斜面をおよそ40mに渡り縦断するように調査区を設定し調査が実施された。

発掘調査は、2000年6月1日より実施した。まず重機により全体的におよそ30cmの表土を排除し、グリッド設定と遺構の確認作業を行なった。この段階で土坑や溝が確認されたため、遺構掘削と記録作業を随時行なった。谷が深くなる調査区南側を残して大沢ラピリ層の調査は一先ず完了とし、6月8日より再度重機により北側の調査区の大沢ラピリを排除し、縄文時代の遺物包含層に対する調査に移行した。南側では15日に重機による掘削を行い調査に入った。縄文時代の包含層では、出土遺物に対して原則として平面的な位置と垂直的な位置を記録して取上げを行なった。

当遺跡では1987年の調査をはじめ、これまで竪穴住居跡や炉跡など縄文時代中～後期に該当する遺構が発見されてきたが、今回の調査では新たな縄文時代の遺構は発見されず、勝坂式や曾利式土器を主体とする縄文時代中期の土器片の検出が調査の大部分を占め、各グリッドで遺物の取上げを行なった。6月9日から6月14日まで雨天により現地調査が中止された為、実際に遺物取り上げ作業が行なわれたのは15日からであった。遺物の包含が認められたのは、暗褐色土層と黒褐色土層で、調査区内に数箇所サブレンチを設定し調査した結果、極暗褐色土層より下層からは遺物の包含が認められないと判断された。

こうして調査は進められ、ほぼ全体の調査区内で遺物の検出作業が終了した7月24日に土層図や地形図の実測に取り掛かり、28日に発掘調査現場での作業は完了した。

資料の整理ならびに報告書の作成を富士宮市教育委員会文化課埋蔵文化財整理事務所において行ない、本書の刊行を以って終了している。
(小野田 晶)

3. 調査区の名称

調査区を縦断するように設定されたラインに直交するラインを設定し、5m×5mのグリッドを設定した。縦断するラインはN-17°-Eである。調査区を縦断するグリッドラインにはA～Jを、横断するラインには1～3を順にふりわけ、西北隅の交点をもってそのグリッド名としている。

(佐野)

第III章 調査の内容

1. 遺構 (第7・8図)

今回の発掘調査で発見された遺構は、年代が推定される遺物が散見されながら、遺構の性格により決定的な遺物の出土が見られないため明瞭な時代の確認ができないが、全体的に軟質の覆土であることから、おそらく中近世以降のものと思われる円形を主体とする土坑3基と等高線に沿う溝3条が確認されている。いずれの遺構も表土排除後の大沢ラビリ層において発見されたもので、遺構の規模はその確認面より計測されたものである。

(1) 土坑

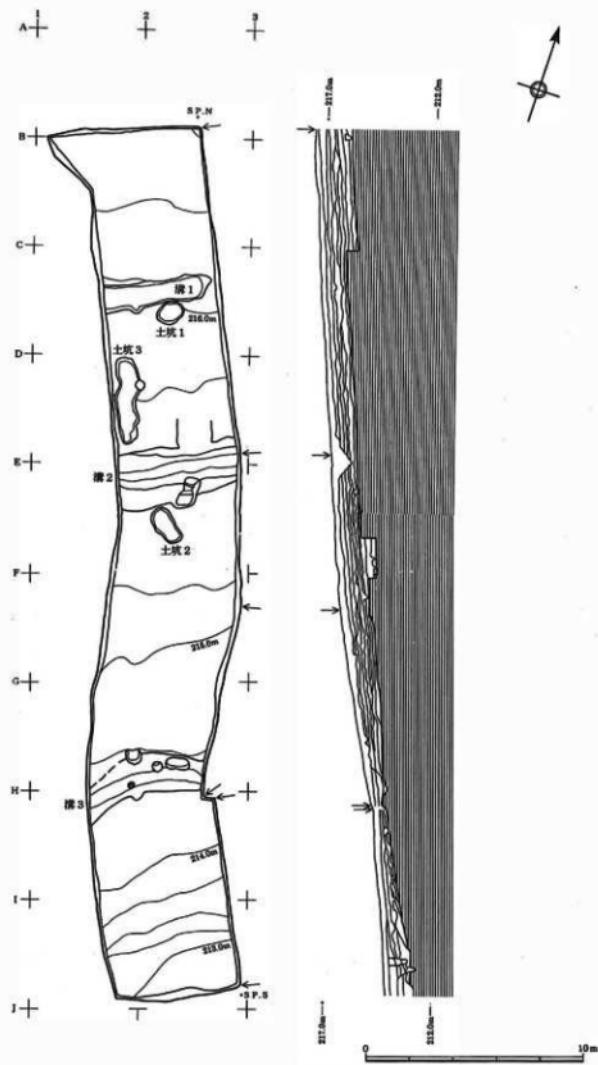
土坑1(第7図)はC2グリッド中央西側に位置する。平面形は長径125cm×短径100cmの略円形を呈し、長軸はN-43°-Eの方向を示している。掘り込みはしっかりとしているが、深さは6cmと浅く、落ち込みとして見分けが付けづらい状態であった。覆土は黒褐色土で若干のスコリア粒を含んでいる。底面は平坦である。

土坑2(第7図)はE2グリッドの中央西側に位置する。平面形は長径170cm×短径87cmの長方形と相似した稍円形を呈し、長軸はN-44°-Wの方向を示している。掘り込みはしっかりとしており深さは15cmである。覆土は黒褐色土であるが、ベースとなる地形の傾斜の上部にしたがいスコリアの混入が目立つようになる。底面はほぼ平坦である。

土坑3(第8図)はD1グリッド北東端に位置する。平面形は遺構北側が植物根による搅乱をうけてしまっているため、掘り込みと輪郭は曖昧になっている。長径393cm×短径104cmの構造の不整形をしているが、比較的しまりのある黒褐色土の堆積をみると、本来は長円形を意図していたか、もしくは複数の土坑が重複していたかのようにも捉えられる。深さは確認面より8cmと深い残存状態で、自然地形として捉えることも可能であるが、覆土はベースとなる地形の傾斜の低部ではスコリア粒を微量に含む黒褐色土であり、坑の壁寄りではやや大粒のスコリア粒を含んだ明褐色土となる。また、この土坑の構造内に直径40cmのピット状の落ち込みが確認されているが、植物根が深く縄文土器包含層まで入り込み、覆土は土坑内のものより黒味を帯びてしまが無く、基底部が認められず、これに伴う遺物の出土もなかった。土坑3に付属したものであるかは不明である。

(2) 溝

Cグリッド内の標高216m付近にN-28°-Wの軸方向と並行する120cm程の細い溝状遺構を溝1(第7図)とした。覆土は黒褐色土であるが、直南の土坑1のものよりしまりが弱く、部分的に赤味豊った橙色スコリアが塊となって混入している。南西方向へ緩やかに下る傾斜をもつ溝底部は深さ20cmを測り、北東側に向かい傾斜の上方につれて溝底が徐々に浅くなり、調査区東端では削平により、確認面での溝跡は消失する。覆土中より流れ込みの縄文土器の小片が4点と近世以降の陶磁器片が3点出土している。



第6図 調査区全体図

溝2（第7図）はEグリッド内の標高216m付近にN-25°-Wの軸方向と並行して位置する。覆土はしまりの弱い黒色土であり、スコリア粒の包含量や粘性により9層に分層され、溝壁の崩落などの自然発生的な堆積の状況が窺える。溝底は深さ約70cmで栗色土層下部まで掘り込まれている。また遺構南側の溝壁は人工的な階段状に成形された箇所があり、人が当溝を昇降する際に利用していたと想定される。遺構南側20cm程離れたところに土坑2が確認されている。覆土中より採取された遺物は流れ込みの縄文土器片が9点と16世紀の船載陶磁器である白磁C群の端反皿の口縁部片（第14図6）をはじめ近世代以降の陶磁器片が4点検出されている。

溝3（第8図）はG-Hグリッドの標高214.75mの等高線に沿う状況で確認された。調査区東端よりN-16°-Wの軸方向で西へ向かうが、約3m付近でS-47°-Wの軸方向に屈曲する。溝幅は調査区西端壁際が最大幅でおよそ300cmを測り、東側の最小幅がおよそ160cmであった。溝底は東から西に向かって緩やかに傾斜し、およそ100cmの深さを測り、大沢ラビリ層（II層）より確認される基底部の掘り込みは橙色土層（IX層）まで及んでいる。覆土は粒子が粗い黒色土の堆積が三層からなり、最上層はスコリアを少量含んでいるが、中層はそれに比べてスコリアの含有量が減少する。最下層はローム、褐色土ブロックの混入が目立つ。本溝より出土した遺物の中には15世紀後半に年代が相当する古瀬戸後IV期の灰釉縫釉小皿の口縁部片（第14図4）と16世紀後半の大窯期に生産されていた志野丸皿の口縁部片（第14図5）の2点の中近世国産陶器が出土している。

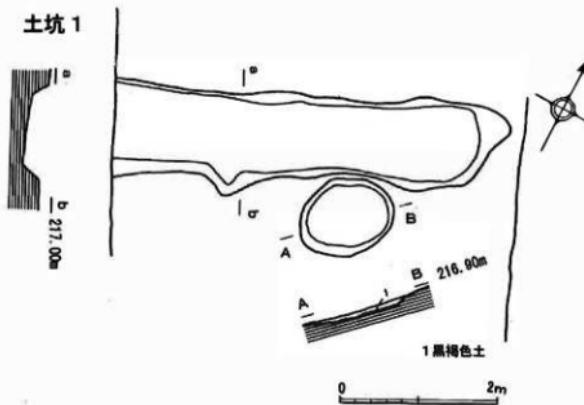
また、北側の溝岸にピット状の落ち込みが3基見受けられるが、中央と東側の坑からは覆土中に残存したラッカセイの殻が検出されるなど性質的に耕作土壤と同質であり、柿やツツジの木が調査区近隣で栽培されていることから、農地として利用されていた際、植樹や農作物の植え込みにより発生したものではないかと想定される。これらの坑の構造は共に溝壁中腹に位置し、断面をみると、基底部が陸側に向かって深く掘り込まれ、靴下のような型状を呈しており、東側のものにおいてはその掘り込まれ方が著しい。溝3は、調査区東隣の畠地に段差のできた土地区画があり、その境界線と延長上一致することから旧来の地割であったかと捉えることができる。

（小野田）

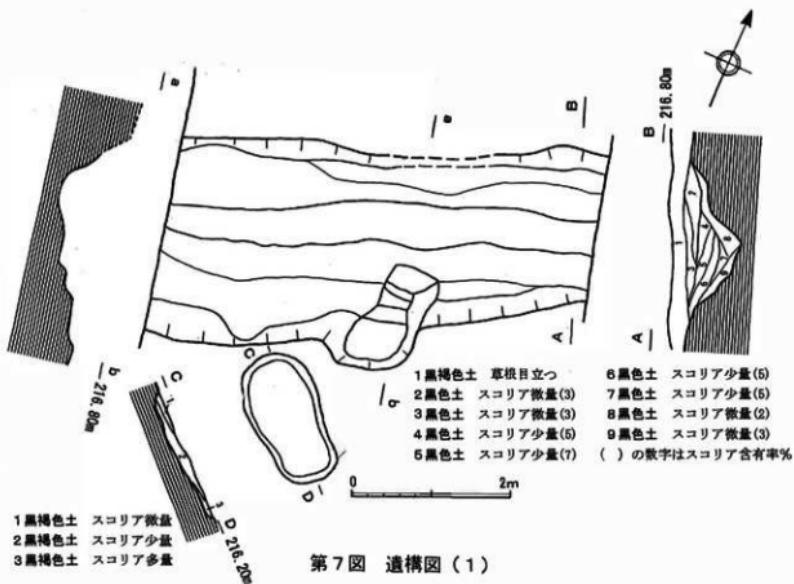
名稱	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
土坑1	125	100	6	略円形、底部平坦
土坑2	170	87	15	長円形、底部平坦に近い
土坑3	393	104	8	溝状の不整形、底部平坦
名称	幅 (cm)	軸方向	深さ (cm)	備考
溝1	94~126	等高線に沿う	20	直行
溝2	190~264	等高線に沿う	70	直行、階段状の溝岸
溝3	136~170	等高線に沿う	100	屈曲

表2 遺構計測表

溝1 土坑1

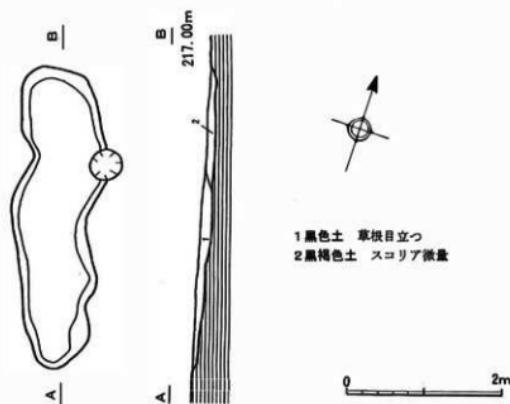


溝2 土坑2

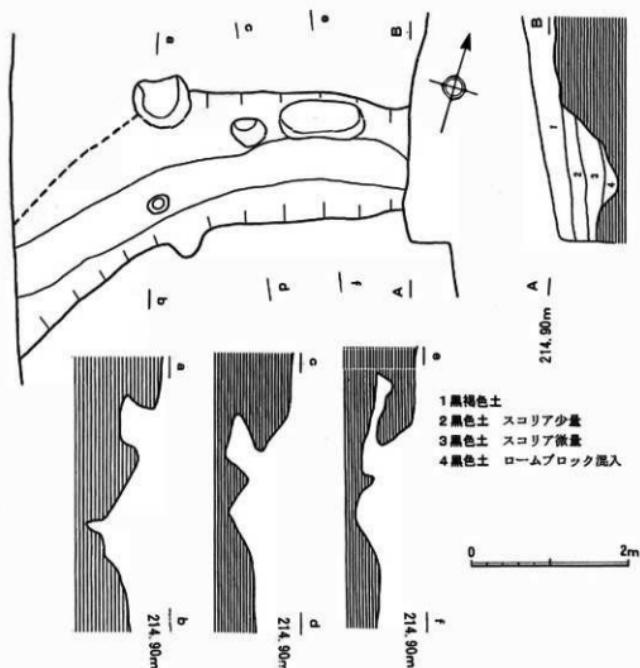


第7図 遺構図(1)

土坑3



溝3



第8図 遺構図(2)

2. 遺物 (第9~16図)

笄輪A遺跡は大沢川とサギ沢川とで挟まれたやや小高い丘陵とその南に広がる平坦面一帯をその遺跡範囲としている。第2次調査区はそのうち東南の一部分、丘陵がサギ沢川と接する幅50m程の斜面地にあたる。そこから西に広がる平坦面からすればやや奥まった景観となっている。

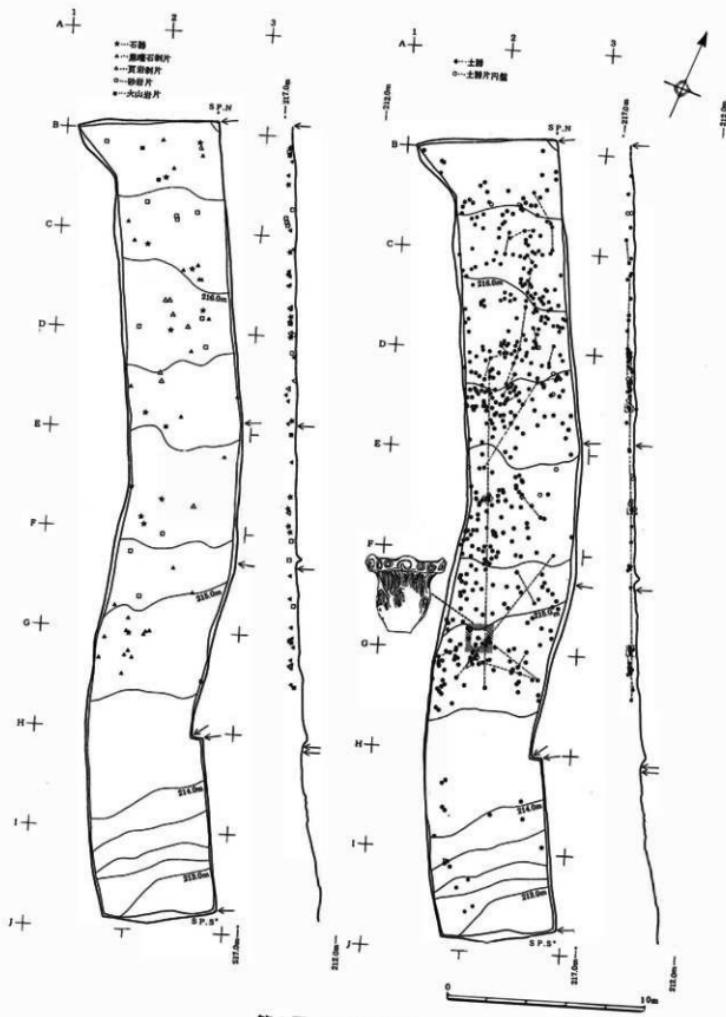
今回の第2次調査においては遺物総数711点、そのほとんどが縄文時代中・後期に属し、うち土器は全体の68%にあたる480点、土製円盤は2%にあたる12点、石器は2%にあたる14点、中近世陶磁器は1%にあたる6点の出土をみた。前回第1次調査区は第2次調査区の西方向50mほど平坦面に近づき、そこでは建替えのある堀之内I式期の住居跡（略円形・径4.5×4.0m程度）とトレンチ北辺において勝坂3式～曾利II式土器の集中区が認められ、以南には分布が及ばないことが確認されている。今回出土状況は遺物は谷側に下るにつれ疎になるという傾向はあるものの概して調査区に満遍なく広がるが、遺物集中区と積極的に認めうる出土状況ではない（第9図）。また遺物の時期と同時期の遺構は確認されず、今回調査における遺物包含層であるIV層とV層相互に各型式が混在して出土していた。これらは今回調査区は遺跡の生活域中心からはやや外れた位置にあたり、遺物は元位置をとどめず流れ込みに伴うものであることを示唆している。

なお、第5図調査区位置図と第9図遺物分布図にみえる矢印はセクション接続箇所を示している。また、第9図の遺物分布図の右、土器分布図の垂直分布図に示したのは、本報告書において実測図を記載したものののみとなっている。石器類遺物分布図の垂直分布は平面図に記したすべての点を示している。なお、遺物の分布がやや疎となるEグリットライン付近は溝2に、Hグリットライン付近は溝3にII層以下を切られている。

(1) 縄文土器

本遺跡出土縄文土器は、以下のとおり5分類される。第I類 勝坂式土器、第II類 曾利式土器、第III類 加曾利E系の土器、第IV類 堀之内式土器、第V類 その他の土器とした。第1次調査においては勝坂3式～曾利II式と堀之内I式土器が出土していたが、今回第2次調査ではそれに加え、曾利III～V式土器の特徴を有する土器が出土した。しかし今回出土土器は勝坂式土器の出土が最も多く、ついで加曾利E系の土器、曾利式土器、堀之内式土器は4点であった。ほとんどが破片資料であり、復元可能であったのは第II類 曾利式土器2点であるが、生活域として継続した時間は周辺の遺跡に比べて長く、未発掘域の広さからすると昭和初期より「岳南三大遺跡」として評価を与えてきたのも当然であろう。

本遺跡と潤井川を隔てて対峙する富士宮市滝戸遺跡は、足下に潤井川を配して東北方向の舌状台地一帯、白尾・明星山丘陵標高130メートル付近に立地する。縄文時代早期～縄文時代後期後半・弥生時代後期～古墳時代前期・古墳時代後期の複合遺跡で、各期の豊富な土器群と共に、発掘された11,740m²のうちに縄文時代早期～後期後半の間4面にわたる配石、また配石を伴う土壙、竪穴住居4棟、埋甕13基が確認されてい



第9図 遺物分布図

る。この周辺もまた、多くの遺跡の密集地帯である。また、本遺跡の3kmほど南、東に天間沢を控え、富士山の丘陵を下り潤井川の沖積地と接する付近以北、広大な区域に遺物の分布が知られる富士市天間沢遺跡は、現在においても富士宮市と富士市の市境であり、駿河湾奥の低地と北方の山々を結ぶ道のいわば玄関口にあたる立地条件にある。縄文時代中期中葉～後期前半・古墳時代初頭期の複合遺跡で、合計12,803m²の発掘区に21基の竪穴住居、55基の土坑（うち石による付設施設を有するもの6基、埋甕を伴うもの7基）、配石が広大な遺跡範囲の一部分にて確認されている。縄文時代該期の豊富な土器群とともに、富士山西南麓の好資料となっている。

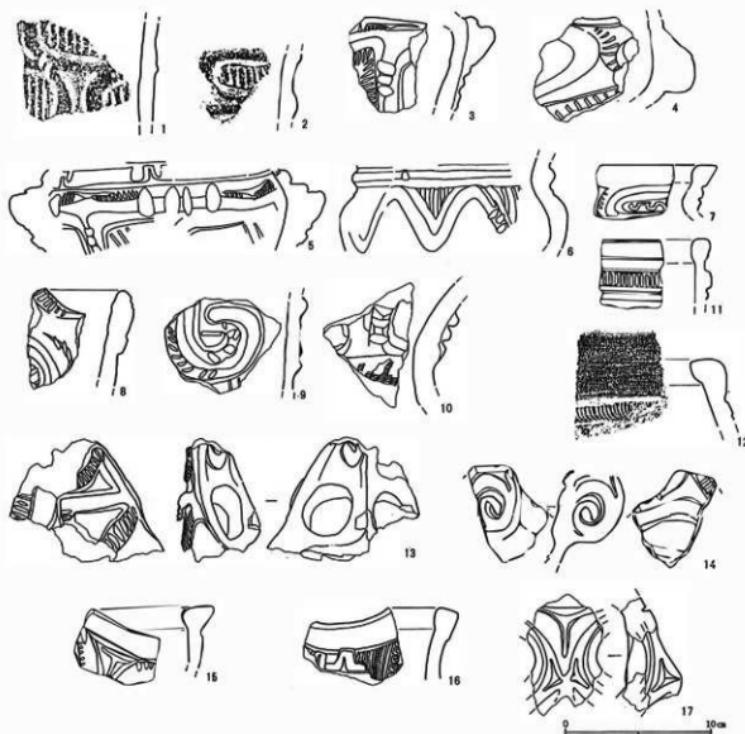
本遺跡を含めてこの3遺跡は縄文時代中期中葉～後期前半において直線距離にしてお互いに5kmほどの位置関係を保っており、該期における「中核遺跡」と位置付けられて（植松1997）、その周辺5kmの生活圏が想定されている。この3遺跡は継続期間もほぼ同様である。今回第2次調査の出土土器はほとんどが破片資料であるため、資料が豊富な滝戸遺跡と天間沢遺跡などを参考にし記述を行っている。

第I類 勝坂式土器（第10図1～17・第11図18～21）

破片資料のみのため、全体の文様帶構成は不明である。梢円横帶区画文を有するものの（1・2）、隆帶上に刻みを有するもの（3～13）、浮彫文を有するもの（14～17）、縄文を有するもの（18～21）がみられる。13は有孔山形把手である。すべて第1次調査と同様の流れをくむものである。これらは鈴木分類（鈴木1981）における勝坂式3式相当が主体と考えられるもので、器形は屈折底のもの（21）、円筒形の胴部のもの（1・9）、強くくびれた頸部をもつもの（6・10）、口縁部文様帶がく字状に肥厚したもの（3～5）、外反する口縁部に無文帶を持ち下部がふくらみを持つもの（18～21）、波状口縁となるもの（8・15・16）がある。1の多段梢円横文を有し円筒形の胴部となるものは隆帶上の刻みがごく一部に施されている。14は渦巻状の突起部分を持つ口縁部である。やや疑問はあるが本類に含めた。第1次調査では土器集中区より、口縁部を櫛曲文で飾り縦位の華美な装飾把手をつけた大形の土器や、縄文地文とし口縁部1つの突起部分より3本指の意匠を垂下した土器などが出土している。先述の滝戸遺跡や富士市天間沢遺跡は文様構成や波状口縁を持つ土器などに強い関係性が認められ、静岡県東部において勝坂3式相当の土器を出土する主要な遺跡である、富士山の東、愛鷹山麓上に立地する沼津市二ツ洞や沼津市広合遺跡ともよく類似する。

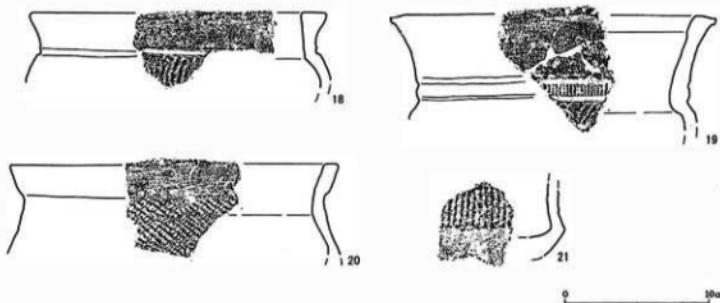
第II類 曾利式土器（第12図22～24）

第1次調査においては曾利縄文系の小型土器など曾利I～II式土器が出土している。今回第2次調査では加えて曾利III・IV式土器も出土した。22はく字状を呈する無文口縁部上面にのみ縦位の浅い隆帶があるので、器壁も厚く大形の土器である。23は口縁部は円文を連ねて飾り、胴部は渦巻文により縦の文様帶が表出されその間に沈線を施すもので、曾利III式の特徴を示す。図示されていないが渦巻文は渦の中を沈線で充填するものとしないものとが交互に配されている。この土器は調査区中央、傾斜がや



番号	出土区	名稱	型式名	文様	出土	完成	色調	備考
1	D1	深鉢形土器	縫板	縫内文	粗 多長・英、有	良	縫	
2	C1	深鉢形土器	縫板	縫内文	粗 多長・英、少有	良	にぶい縫	
3	D2	深鉢形土器	縫板	縫板	粗 多長・英、少有	良	縫	
4	F1	深鉢形土器	縫板	縫板	粗 多長・英、少有	良	縫	
5	D1/C2	深鉢形土器	縫板	縫縫・縫縫文	粗 多長・英、少有	良	にぶい縫	
6	C2	深鉢形土器	縫板	縫縫・縫縫文	粗 多長・英、少有	良	にぶい縫	内面スス付着
7	D1	深鉢形土器	縫板	縫内文	粗 紗粒を盛入か	良	縫	
8	F2	深鉢形土器	縫板	縫内文	粗 多英・長、少有	良	にぶい縫	波状口縁
9	D2	深鉢形土器	縫板	縫縫文・沈縫文	粗 多英・長、少有	良	にぶい縫	
10	C2	深鉢形土器	縫板	縫縫文・縫縫	粗 異・英、少有	良	にぶい縫	
11	D2	深鉢形土器	縫板	縫縫	粗 紗粒を盛入か	良	灰縫	
12	C2	深鉢形土器	縫板	縫縫・縫縫	粗 紗粒を盛入か	良	にぶい縫	
13	E2	深鉢形土器	縫板	縫縫	粗 多長・英、異	良	灰縫	
14	F2	深鉢形土器	縫板	縫縫文・縫縫	粗 英・長、少有	良	明褐色	把手部分
15	C2	深鉢形土器	縫板	縫縫文	粗 紗粒を盛入か	良	にぶい縫	把手部分
16	B2	深鉢形土器	縫板	縫縫文	粗 多英・長、少有	良	にぶい縫	
17	F2	深鉢形土器	縫板	縫縫文	粗 多英・長、少有	良	縫	把手部分スス付着

第10図 第I類土器実測・拓影図



番号	出土区	名称	型式名	文様	胎土	焼成	色調	備考
18	C2	深鉢形土器	勝板	周文II・比縫	粗 細長・少有、雲	良	灰褐	
19	B2	深鉢形土器	勝板	周文II・陰縫	粗 砂粒を混入か	良	灰	
20	C2	深鉢形土器	勝板	周文II	粗 細長・少有	良	灰褐	
21	D1	深鉢形土器	勝板	周文II	粗 多英・長・有、少雲	良	明灰褐	

第11図 第I類土器拓影図

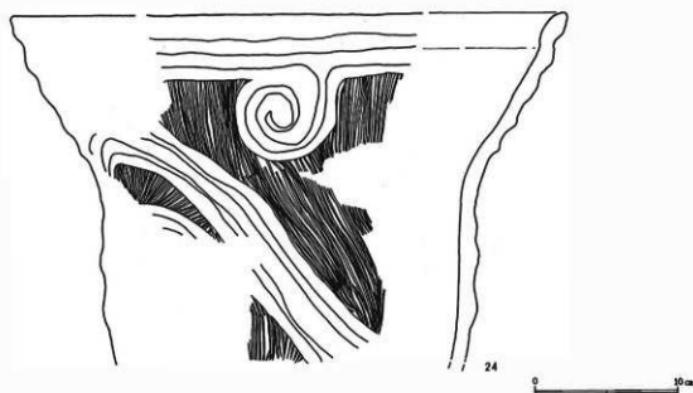
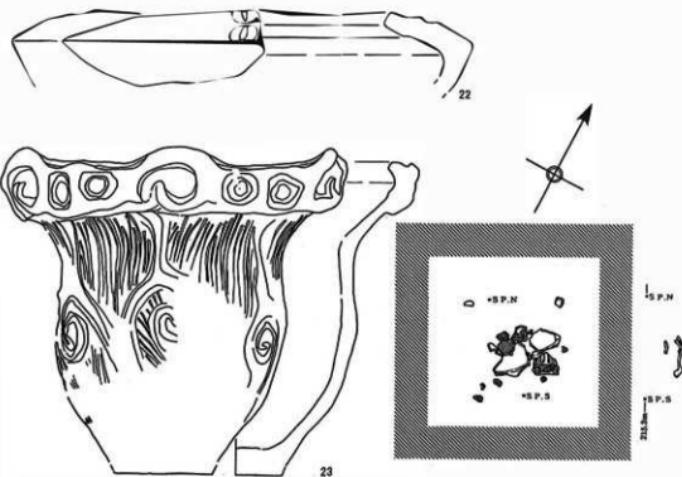
や緩やかとなり、谷の影響を受けて地層が乱れ始める付近に折り重なって出土した。周辺には配石や土坑といった遺構ではなく、他の多くの土器が破片資料となって包含層中に混在して出土した状況からすれば異質である。底部と一部の胴部を欠く。24は口縁部文様帯が省略され浅い縦帶がめぐるようになるもので、キャリバ一形の器体に渦巻文を口縁部横位隆帯から垂下し、胴部には大柄の渦巻文を配する曾利IV式である。

第三類 加曾利E系の土器（第13図25～31）

いずれも破片資料である。無節縄文のものもみられる（26～28）。29は曾利縄文系の色彩が濃い土器である。加曾利E式土器は滝ノ上遺跡においてはその出土量より曾利式土器よりもはるかに少ない。天間沢遺跡では加曾利E式土器と曾利式土器との分離が明確でなく、本遺跡においてはその出土量と相まって不明である。しかし本遺跡の2km南東方向に下った丘陵上に立地する滝ノ上遺跡には、加曾利E式土器と明確に認めうる土器が出土し曾利式との折衷と思われるものはかえって貧弱である。くびれの弱くなった深鉢胴部を口で区画し、その内側を主に八連文で充填するものがみられる。滝ノ上遺跡はその他、重三角文などを連ねた横帶文脇にキャタピラ文といわれる整然とした刻みが施される、勝板2式土器の特徴を有する土器と、曾利I・II・V式に比定できる土器の出土もみている。

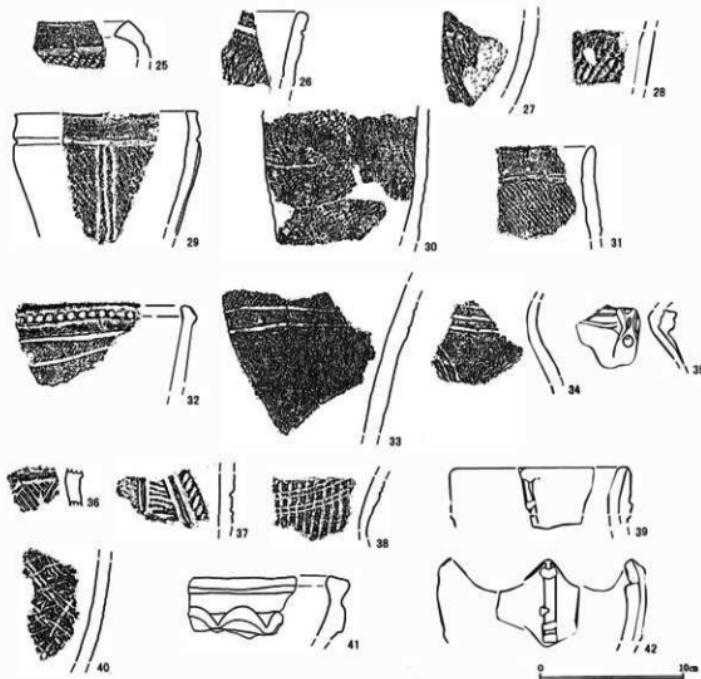
第四類 堀之内式土器（第13図32～35）

少量の破片資料であり、その詳細は知れない。磨消縄文を施文するもの（32・33）と、外反する口縁に沈線を施文するもの（34）、小型精製土器（35）がある。第1次調査



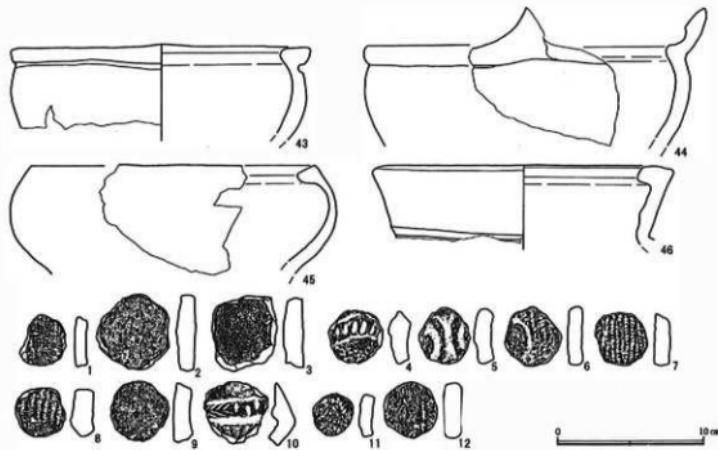
番号 出土区	名 称	型式名	文様	胎 土	施成	色調	備考
22 D2	深鉢形土器	曾利	縦縞	粗 多長-英、少有、少雲	良	にぶい赤褐色	
23 F2/G1 /G2/Bd3Tr	深鉢形土器	曾利	円文・渦巻文・条縞	粗 花粒を混入か	良	明赤褐色	内面スス付着
24 G1	深鉢形土器	曾利	既捨捨・条縞	粗 多英-英、少有	良	にぶい黒	

第12図 第II類土器実測図



番号	出土区	名稱	型式名	文様	胎土	焼成	色調	備考
25	R2	深鉢形土器	加曾利E系	縄文LR	粗、少英・長、少露	良	灰黄褐	
26	F2	深鉢形土器	加曾利E系	無鉛縄文?	粗、英・長、少有	良	明黄褐	
27	F2	深鉢形土器	加曾利E系	無鉛縄文?	粗、多英・長、有少	不良	黄褐	
28	F2	深鉢形土器	加曾利E系	無鉛縄文?	粗、英・長、少有	不良	明黄褐	
29	D1	深鉢形土器	加曾利E系	縄文LR・陰帯	粗、砂粒を混入か	良	に赤い黄褐	
30	D2/E1	深鉢形土器	加曾利E系	縄文LR	粗、砂粒を混入か	良	に赤い橙	
31	B1	盤	縄文	縄文LR	粗、英・長、少有	良	褐	
32	G2	深鉢形土器	堀之内	縄文LR・沈線	粗、砂粒を混入か	良	灰黄褐	
33	G2	深鉢形土器	堀之内	縄文LR・沈線	粗、砂粒を混入か	良	明褐	
34	E2	深鉢形土器	堀之内	沈線文	粗、砂粒を混入か	良	に赤い褐	
35	G2	深鉢形土器	堀之内	沈線・斜村文	粗、砂粒を混入か	良	に赤い黄褐	
36	B2	深鉢形土器	五個ヶ台並行?	細縄線・沈線	や今密、少有	良	灰褐	
37	D1	深鉢形土器	五個ヶ台並行?	陸帯・沈線文	や今密、少英・長、少有	良	に赤い橙	
38	C1	深鉢形土器	五個ヶ台並行?	縄文(?)地文、沈線文	粗、英・長、少有	良	に赤い黄褐	
39	R2	深鉢形土器	?	陸帯	粗、長・英、少有	良	に赤い赤褐	
40	D2	深鉢形土器	?	付加条縄文	粗、英・長、少有	良	に赤い橙	
41	B1	深鉢形土器	?	陸帯	粗、砂粒を混入か	良	橙	
42	C2	深鉢形土器	?	陸帯	粗、長・英、少有	良	に赤い黄褐・波状口縁	

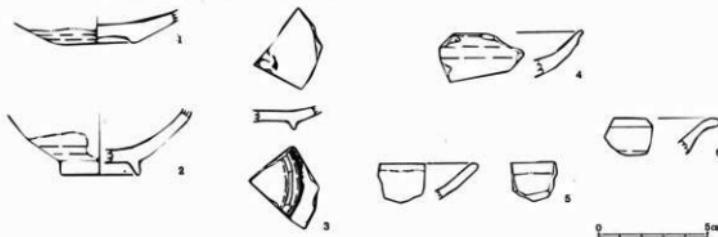
第13図 第III・IV・V類土器実測・拓影図



番号	出土区	名稱	型式名	文様	胎土	焼成	色調	備考
43	C2/ 91/ D2	深鉢形土器	無文	沈	粗 高・長・少有	良	にぶい 棕	
44	C2	深鉢形土器	無文		粗 長・高・少有	良	にぶい 棕	
45	C2	深鉢形土器	無文		粗 多長・高・少有	良	にぶい 赤褐	
46	C2/ D2	深鉢形土器	無文	沈	粗 多高・長・少有	良	にぶい 棕	

番号	出土区	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	色調
01	G2-1	I	3.5	3.0	0.8	7.8	棕
02	F2	I	5.2	4.5	1.4	31.5	灰 黄褐
03	B1	II	5.8	4.9	1.3	32.1	灰 黄褐
04	E2	III	3.8	3.4	1.3	14.0	明赤褐
05	E2	III	4.0	3.9	1.0	16.3	にぶい 黄褐
06	F2	III	3.8	3.5	1.2	15.7	にぶい 赤褐
07	E2	III	3.8	3.6	1.1	17.3	にぶい 棕
08	E1	III	3.6	3.5	1.5	17.6	にぶい 棕
09	C2	III	4.4	4.1	1.4	20.7	にぶい 棕
10	D2	III	4.1	4.0	1.9	20.7	棕
11	G2-1	III	2.9	2.7	8.5	7.6	にぶい 棕
12	B2	III	3.8	3.6	1.2	20.0	にぶい 棕

番号	出土区	器種	底地	年代	熱量	釉調/文様	既存状態	備考
1	G2	打刃器	麻芦・美濃	17C前	底径3.4cm オリーブ褐色	底1/3		
2	楊葉原	器			底径3.4cm	灰白色	底1/3	99年調査
3	F2	斜刃器	肥の糸			コバルト色	1/4以下	
4	唐3	丸皿	麻芦・美濃	17C前		青白	1/4以下	油野美
5	唐3	斜刃小刀	麻芦・美濃	15C後		オリーブ黄色	1/4以下	
6	唐2	壺	中国	15C前		白	1/4以下	白山城



第14図 第V類土器実測図・土器片円盤拓影図・中近世陶磁器実測図

においては住居跡床面上において人面把手のつく堀之内I式土器の深鉢形土器が出土している。なお、淹戸遺跡では堀之内式期の土器出土量が最も多く該期を遺跡の最盛期としている。天間沢遺跡では勝坂式土器や曾利式土器に比べその個体数が激減しわずか3個体となっている。

第V類 他の土器（第13図36～42、第14図43～46）

36は集合沈線と細隆線のあるもの、37は集合沈線と刻みのある隆帯のあるもので、38は胴部にくびれを持ち、地文を縄文に4本の沈線が施されるもので、沈線はゆるくカーブを描いている。37・38は他に比べて胎土が密である。破片資料であり詳細は知れず、縄文時代前期末～中期初頭の五領ヶ台式土器期かと思われる。40は付加条縄文を施文する土器である。施文は粗く、重複し、施文単位を読みとることが困難なほどである。底部から口縁部まで緩やかに開く砲弾型の器体に対して斜方向、格子状に施文している。付加条縄文を施文する土器は三島市北山遺跡や淹戸遺跡では多くの出土例をみ、小型精製土器の出土が多い堀之内II式期において、大型の深鉢としての機能を果たしていたのではないかと推定している（馬飼野1997）ものである。41は内湾気味の口縁部に凹圧のある横位の隆帯をもつものである。39・42は口縁部より縦位の隆帯を添付するもので、径が15cm足らずの小形の土器である。両方とも縦位の隆帯を挟むようにさらに粘土の添付されるもので、39は紐をこま結びしたような意匠である。42は波状口縁となる。43～46は無文の口縁部である。すべて口縁部が内湾する。43は口唇部を外側にとびださせて平縁となるもので、横位沈線で口唇部をさらに強調している。44は口縁に突起を作り出すものである。45は43の逆で、口唇部をさらに内側に折り曲げるもので、やや滑らかなく字状の口縁となる。46はく字状の口縁となるものである。無文帶を設けて横位の沈線で区画している。43～46は勝坂3式～曾利1式の口縁部を無文帶とし、以下を飾る深鉢形土器である可能性が高い。

（佐野）

文献

- 植松章八1997「淹戸遺跡の発見・発掘調査とその研究」富士宮市文化財調査報告書第23集『淹戸遺跡』
富士宮市教育委員会1993富士宮市文化財調査報告書第16集『富士宮市の遺跡』
富士宮市教育委員会1997富士宮市文化財調査報告書第23集『淹戸遺跡』
富士宮市教育委員会1981富士宮市文化財調査報告書第3集『淹ノ上遺跡』
富士市教育委員会1984『天間沢遺跡Ⅰ 遺構編』
富士市教育委員会1985『天間沢遺跡Ⅱ 遺物・考察編』
沼津市教育委員会1990沼津市文化財調査報告書第49集『広合遺跡（b・c・d区）・広合南遺跡発掘調査報告書』
沼津市教育委員会1991沼津市文化財調査報告書第52集
『広合遺跡（e地区）・二ツ洞遺跡（a区）発掘調査報告書』
大仁町教育委員会1990大仁町埋蔵文化財調査報告第11集『公藏面遺跡発掘調査報告書』
鈴木保彦1981「勝坂式土器」『縄文土器大成2 中期』

中部高地縄文土器集成グループ1979『中部高地縄文土器集成第1集』

馬飼野行雄1997「17. 付加条縄文が施される土器」『瀬戸遺跡』

(2) 中近世陶磁器（第14図1～6）

本遺跡より出土した舶載・国産陶磁器については元富士大宮司館跡の調査報告（富士宮市教育委員会2000）と同様に、舶載陶磁器に関しては、森田氏の分類・編年案（森田1982）と小野氏の分類・編年案（小野1985）を参考基準とし、国産陶器に関しては藤沢氏の分類・編年案（藤沢1996、1997）を基準としている。

出土した陶磁器で図化されたものは6点あり、これらは中・近世代に流通した陶磁器であると思われ、詳細は第14図下と合わせて観察表に示した。1はG2グリッドで一括採取された資料で、大窯第2段階の灰釉灯明皿と推定される。削り込み高台で、高台部周辺は無釉である。2は1999年度の2次調査時に出土した資料である。体部上半に長石釉系の施釉がされており、高台は台形状に高く鋭く削り出されている。3の染付磁器は、高台部まで施釉され、その断面は低い三角形を呈している。4は溝3の覆土中より出土した。長石釉が施され、やや赤味を帯びた貫入がある。釉調から大窯第4段階の志野焼と推定される。5も溝3の覆土中より出土した。古瀬戸後IV期の灰釉縁釉小皿の口縁部である。出土した陶磁器の中では最も年代が遅い資料である。6は溝2の覆土中より出土した。口縁部が外反する端反皿で、いわゆる白磁C群と呼ばれる舶載陶磁器であると推定される。

資料点数が少なく、各陶磁器の年代に散らばりがあるという結果から、傾斜地形に位置する遺構であることを前提に、出土遺物と溝の直接的関連性は弱いことがいえる。

（小野田）

《文献》

富士宮市教育委員会2000『元富士大宮司館跡』富士宮市文化財調査報告書 第24集

森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

小野正敏1985『出土陶磁よりみた一五、一六世紀における画期の素描』『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』

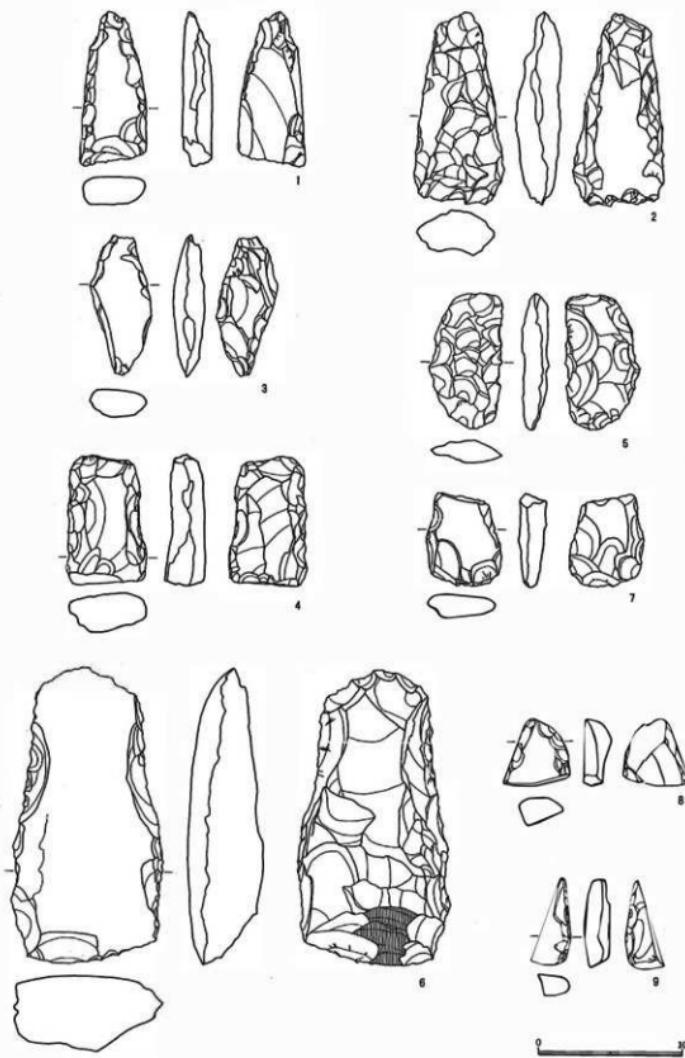
11月号 №416 東京国立博物館

藤沢良祐1996「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

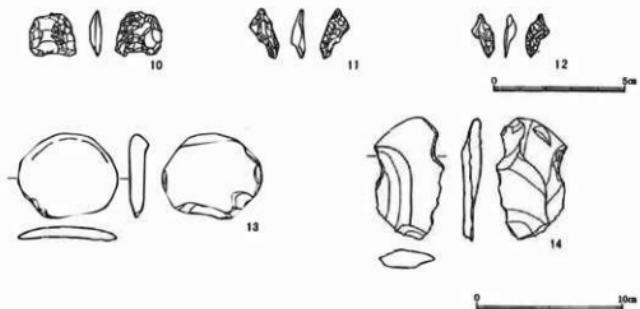
藤沢良祐1997『瀬戸・美濃系大窯とその周辺～大窯生産の成立と展開～』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

(3) 土器片円盤（第14図1～12）

本遺跡よりは発掘面積土器片円盤12点が出土した。瀬戸遺跡よりは119点が出土し、その製作技法より3分類している（馬飼野1997）。すなわち、第I類 打ち欠きによるもの、第II類 打ち欠き後一部研磨によるもの、第III類 打ち欠き後、周縁研磨によるものとされ、本遺跡もそれに倣った。底部使用のものは2点（2・3）、その他は胴部が使用されている。型式としては勝坂式土器とわかるものが5・8・10と3点認められるにすぎない。土器片円盤は土器の破片を「再利用」したものであり、その



第15図 石器実測図（1）



番号	形態	出土区	石材	形状	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
1	打製石斧	B2	砂岩	楔形	(10.7)	4.7	2.1	113	刃部欠損
2	打製石斧	E1	砂岩	楔形	(13.3)	6.3	3.2	235	刃部欠損
3	打製石斧	復原	砂岩	(楔形)	(9.8)	4.3	2.2	80	基部・刃部欠損
4	打製石斧	C2	真岩	楕圓形	(8.9)	5.5	2.9	185	刃部欠損
5	打製石斧	E1	砂岩	楕圓形	9.4	5.1	1.8	80	完成品
6	打製石斧	D1	砂岩	楕圓形	(20.5)	10.5	5.3	1360	刃部欠損/刃部磨耗あり
7	打製石斧	E1	砂岩	?	(6.4)	5.2	1.9	50	基部欠損
8	打製石斧	C1	砂岩	?	4.6	4.7	1.9	38	基部のみ
9	打製石斧	E2	砂岩	?	6.0	2.3	1.7	19	側面のみ
10	石鏃	C2	黒曜石	凹基無茎	(1.7)	1.8	0.5	1.3	先端欠損
11	石鏃	G1	黒曜石	凹基無茎	1.9	(0.8)	0.5	0.4	基部欠損
12	石鏃	B2	黒曜石	凹基無茎	1.6	(0.8)	0.4	0.2	基部欠損
13	スクレイバー類	C2	砂岩	楕刀型	5.7	6.9	1.3	45	刃部欠損
14	石匙	F2	砂岩	楔型	(8.4)	4.9	1.3	35	一部欠損

第16図 石器実測図（2）

使用に関して欠損しているのか未製品なのか、それともそのままの形で完成品なのか、その境がはっきりとしない。その出土状況は包含層中に点在したり、住居跡床面において複数個出土したり、住居跡覆土中であったりする。縄文時代中期後半の配石遺構や後期の配石を伴う土壤群が確認された富士宮市淹上遺跡では1点の出土もなく、富士宮市淹戸遺跡や富士市天間沢遺跡、三島市押出シ遺跡といった集落跡においては出土数が多い。人々の生活の領域に保有されていたものであることは確かであろう。

《文献》

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1997静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第111集『押出シ遺跡(遺構編)』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第119集『押出シ遺跡(遺物編)』

(4) 石 器 (第15・16図)

本調査区より出土した石器は14点、うち打製石斧9点(1~9)、石鎚3点(10~12)、スクレイバー類1点(13)、石匙1点(14)である。5の打製石斧1点を除いて他はすべて欠損品である。第9図左の分布図は、石器と加工痕のある剥片などの分布を示している。Eグリットでは打製石斧4点(2・4・6・7)が狭い範囲内で出土し、Gグリットにおいては黒曜石剥片がやや分布する中に石鎚(10)が出土している。

石材は砂岩・頁岩・黒曜石であり、富士宮市周辺の遺跡から出土する石器の標準的な石材である。打製石斧には、緻密で硬質であり、片状となっている砂岩や頁岩が選ばれている。ただ、1と大型で並外れて重量のある6は、疎でやや軟質、片理の弱い砂岩である。石鎚は3点とも黒曜石を使用している。1には斑晶が少量みられ、2・3はみられない。また、3は茶色と黒色が層状となって観察できるタイプのものである。

打製石斧は基部より刃部を欠損するものが大半を占める。その平面形状が撥形となるもの(1~3)、短冊形になるもの(4~7)とが認められ、そのほとんどは側面形態が刃部の形状が両刃となる左右対称で、厚さ2cm前後~3cmほどに収まる(1~5・7)。該期の打製石斧のあり方と同様であろう。大型の6のみ、刃部に一部刃縁まで磨耗痕が確認できるものである。側面形態をみると、基部下半のふくれた部分に重量がある非左右対称であり、片刃の可能性もある。5はやや湾曲のある短冊形で、側縁に抉りの入るものである。抉りが入るものにはその他4・6がある。

石匙(13)とスクレイバー類(14)は河原石といえる円錐面が残っている。剥離痕が少なく、雑なものである。

今回調査の範囲においては、石皿・磨石・蔽石・台石といった調理具や石錘といった漁撈具、磨製石斧・石鎚などの農工具、石棒などの祭祀具の出土はみていない。ここには図示していないが、石皿あるいは台石の破片に縄掛け用の抉りを刻み、何かの錘として再利用されたと思われるものも出土している。

いざれも調査区内に点在し、包含層内に混在して出土している。

(佐野)

第IV章　まとめにかえて

今回の調査区においては縄文時代中・後期に属する遺物の包含層と中～近世に属する遺構・遺物が確認できた。

富士宮市域には194遺跡が数えられている。うち縄文時代中・後期に該当する遺跡は73遺跡（第2図）、全体の38%を占めている。そのほとんどが縄文時代中・後期の複合遺跡となっているが、中期單時期とされる遺跡も存在する。中部山岳地方から関東地方と同じく、富士宮市域もまた、縄文時代中期に遺跡数が増加する地域である。

これまでの調査において出土した土器からは、箕輪A遺跡には淹戸遺跡や富士市天間沢遺跡との近縁性を読みとることができる。勝坂3式期（曾利I式期）から継続的に堀之内式期まで、歩を同じくする時間幅が与えられよう。箕輪A遺跡は第1次調査において堀之内I式期の住居跡が確認されているため、今回調査区近辺に居住域が存在することは確實である。サギ沢川を挟んで対岸に位置する箕輪B遺跡にも該期の遺物は散布し、その居住域が展開する可能性が高い。

本遺跡は昭和の初期からその豊富な遺物より「岳南三大遺跡」とされ、表採品も多い。なかには3面に幅5mmほどの溝がめぐり断面が「Y字状」を呈する硬玉製大珠（野村昭光氏蔵）もあり、本遺跡の規模が知れようものである。

（佐野）

《文献》

野村昭光1976「富士宮市箕輪出土の玉について」『駿豆考古』第18号

※ 野村氏には快く資料を拝見させていただいた。末尾ではあるが、記して感謝申し上げる。

調査体制

今回の調査で富士宮市教育委員会が組織した体制は以下の通りである。

調査主体者 富士宮市教育委員会教育長 藤井國利

調査担当者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英薈

富士宮市教育委員会文化課嘱託員 佐野恵里

富士宮市教育委員会文化課嘱託員 小野田晶

現場作業員 天野秀男 勝俣利雄 田中敏夫 佐藤法夫 村野立巳 堤健一 古郡善明
渡辺修子 山崎里恵 佐野安恵子

整理作業員 佐野求女

事務局 大塚 輝 成瀬正光 赤池敏和 馬飼野行雄 鈴木綾子 村松明美
渡井一信 伊藤昌光 滝川由美子 赤池厚司

報告書抄録

ふりがな	みのわえー いせき						
書名	箕輪A 遺跡						
副書名	富士宮市大岩三ノ輪農道路線敷設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第26集						
編著者名	渡井英誓、小野田晶、佐野忠里						
編集機関	富士宮市教育委員会						
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150 Tel 0544-22-1187						
発行年月日	西暦2001年3月26日						

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
箕輪A	富士宮市 大岩字 三ノ輪	市町村 35				19991213 19991224	30.8m ²	農道路線 敷設事業
遺跡	1299番地7、 1298番地3 他	22207 富士宮市 89	県番号 富士宮市	35° 14' 03"	138° 38' 42"	20000601	250m ²	に伴う事 前調査
20000731								
所収 遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
箕輪A	集落	縄文時代 (中・後期)		土器・石器				
遺跡		中近世以降	溝 土坑	陶磁器				

写 真 図 版



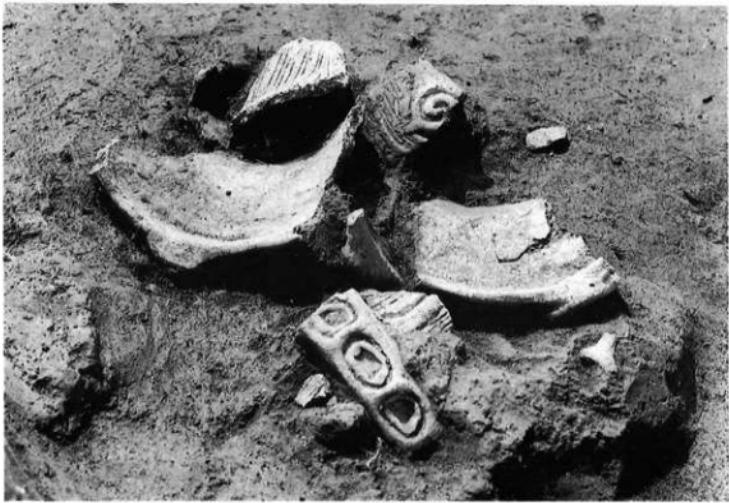
図版1 遺跡遠景



図版2 遺跡近景



図版3 調査区全景



図版4 土器出土状況（第12図23）



図版5 曾利式土器（左第12図23、右同図24）



図版6 土 器



圖版7 土器片円盤



圖版8 石 器

富士宮市文化財調査報告書 第26集

箕輪A遺跡

平成13年3月26日

編 集	富士宮市教育委員会
発 行	富士宮市教育委員会 〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150 (0544)22-1187
印 刷	三扇美術印刷株式会社 〒418-0056 富士宮市西町1番15号 (0544)26-3636(㈹)